垣根越え 向き合う場を

止まった刻（とき）

検証・大川小事故

＜佐藤敏郎さんは、２０１５年に28年勤めた中学教諭を退職。大川小での語り部、ラジオのＤＪ、全国での講演、被災地の若者らをサポートする活動などに飛び回る＞

遺族になってしまったことも、元教員であることも降りられない。自分の持ち味。変に分けず、絵の具のように溶け合っていいと思うようになった。

大川小を案内するときに言っている。「石ころと雑草だらけのこの校庭は、子どもたちが運動会で駆け回った場所です。思い浮かべてください」と。3月11日は卒業式の1週間前。娘（みずほさん）の中学校の制服が届く日だった。特別じゃない場所、特別じゃない日に津波は来た。

「あの日まで」「あの日」「あの日から」があって「これから」がある。地域や学校、子どもの様子を丁寧に話すことが、「あの日」をより伝えるんじゃないかと、最近強く思う。

＜大川小には、佐藤さんらが手作りした簡単な案内板が立つだけ。石巻市は震災遺構として校舎の保存を決めたが、整備に向けた議論は進んでいない＞

大川小抜きに学校防災は語れないのに、市は上告した。教訓を生かそうとしない状況で、何を伝え、何を学ぶというのか。むしろ、今のままでいいんじゃないか。最低限危険がないように整備すれば、大々的な「鎮魂の森」など必要ないんじゃないか。

校舎は今、誰が監督するわけでもなく、ボランティアや遺族が掃除し、たくさんの花が植えられている。どんな場所になろうとしているのか。もはや説明はいらないんじゃないか。校舎そのものが物語っている。

あの場所に「風化」はない。今を生きる私たちが、なぜ校舎を残したのか。きっと未来の人たちは考える。今と未来をつなぐ大事な問い掛け。それに答えてくれる場所であればいい。

＜遺族らでつくる『小さな命の意味を考える会』が作成した冊子は、これまで6万冊が無料配布された。語り部と合わせた地道な活動の先に、佐藤さんは『未来』を模索する＞

今回の連載も含めて、報道で100％は伝えられない。それでも報道を入り口に現地に来た人が周囲の10人20人に伝えれば、遠回りに見えて世の中を変える近道なのかもしれない。できるだけ多くの人と直接会って対話していきたい。

きれい事だけじゃない。石巻市教委による聞き取りメモの廃棄や、心ない対応があった。前例のない事故だからこそ、前例のない着地点が必要なのに、市教委も検証委も慣例にとらわれて変わろうとしなかった。子どもの命が言い訳やうそでごまかされるのは嫌。何を守ろうとしているのか、なぜ裁判まで至ったのかを問いただした上で、建設的な話をしたい。

教育委員会は信頼を取り戻さないといけない。報道は二項対立の図式にしがちだけど、子どもを真ん中に置いて事実に向き合えば、血の通った対話はできるはずだと、今も思っている。

大川小の出来事に、子どもの命に意味付けをしたい。今の大川小は、もめてる、悲惨、かわいそう、というイメージかもしれない。その通りだけど、それだけじゃない。目を背けたくなるようなことにも向き合い、発信することで価値が生まれる。そういう「未来をひらく」場所だと言いたい。

未来って何か。例えば、将来の命が一つでも二つでも失われずに済んだら。ふるさとや学校の素晴らしさを分かってもらえたら。「未来をひらく」ことになる。それぞれが考えて、答えを見つけてほしい。

地域、年齢、遺族と遺族以外…。いろんな垣根を越えて、大川小と向き合える場をつくりたい。「3・11」は過ぎ去った出来事じゃない。あの日の大川小の校庭は、全国どこにでもある。そのことを語り合い、伝え合いたい。

震災遺構として保存される大川小の被災校舎。訪れる人々に、かけがえのない日常の大切さを訴えかける＝5月27日、石巻市釜谷